
二人の間に潜む魔物

羽入 × 菰月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の間に潜む魔物

【Nコード】

N8187R

【作者名】

羽入×菠月

【あらすじ】

藤樹 後は坂倉 美夜の事が好き。何度も告白しようとするがなかなか言えない。そんな中、美夜はある病気で倒れる。そしてその病気は二人の間をなかなか近づけさせないのだ。

前編

九月。残暑がまだ厳しい中、職業校であるこの高校では六割の三年生が就職を志望している。今はその人達が各先生達に面接練習のお願いをし、面接練習をしていた。

俺も三年生、進路は進学。音楽関係の仕事をしたい為、東京の専門学校を受けることにした。最初、親に大学行けとか言われたけど、どうしてもやりたい！と何度も言った結果、今では仕方なく了解してくれた。

突然だが、俺はこの高校生活の間、ずっと好きな人がいる。

その子の名は同級生の坂倉 美夜^{みや}さん。ロングヘアーで大人しい。成績は優秀で、常に学年TOP3に入る。生徒会では副会長を務める。

そんな坂倉さんを俺は初めて会った時、そう入学式から好きだった。何度も何度も坂倉さんに告白しようと試みたが、なかなか言えないまま今日^{こんにち}まで来てしまった。

坂倉さんは常に学年トップ。その平均点は90超え。100点満点なんか何十回も取っている。そんな坂倉さんの進路は京都の超有名大学経済学部。

先程坂倉さんは大人しいと言ったが、こう見えて結構何でも積極的にする人で、クラスでは隠れた人気者。俺はそういう所に惚れてしまったのだ。

十月。就職する人達が次々と内定を貰う中、遂に進学者の試験は刻々と迫ってきた。俺らの高校で進学する人は殆どが公募制推薦。

何故なら職業校と進学校じゃ勉強量が全然違う。だから一般試験なんか受かりっこないのだ。だから俺らには公募制推薦しか大学は行けないのだ。俺は大学など行ける頭では無い為、専門学校。その試験もあと二週間となった。

某日放課後、午後六時。俺は友達とゲームをしていた。

「よしっ怯んだ！攻撃攻撃！」

「わかってるって」

「おい、誰か爆弾持ってきた？」

「いや」

「持ってこいよバカッ」

俺ら三人がやっているのはモンスターを狩る携帯ゲーム。今回のモンスターはかなり手強く、勝率は10%未満という激ムズ。そこで三人でやっているわけだが、なかなか倒せない。

「あと10分だったよ」

画面に残り10分と表記された。

「おい、急ぐぞ！」

「わかってる！ってかおまえこそ隙を見て攻撃せいや！」

「俺は…弱いから見てるよ」

「んなの知るか！」

そんな事を言っている間に俺のキャラは死んでしまった。

「ああー、死んじまったじゃねえか」

「ったく」

二人の会話を聞きながらもう一人は言う。

で、結局…

「時間切れだあ」

俺は天井を見ながら言う。

「こんだけやって涎よだれすら垂らさないとか強すぎだろ」

茶髪で瞳が水色のコイツはアメリカ人の父と日本人の母から生まれたハーフの志原 滉大こうだい。分かりやすく言つとハーフバカつて感じかな？

「まあな。つか俺ら二人でやったからな」

「ちよちよちよ待てえええええいつ！俺も参加したじゃん！一緒に闘つたじゃん！ねえ藤樹」

志原が俺に対して突っ込む。

「確かにこいつはほぼ参加してないな」

「藤樹いいい」

「あんま虐めるな藤樹。志原が泣いちまうぞ」

「オイ、清水目すずめえ。誰が泣いちまうだとお」

「ヤツベ、俺帰るわ。じゃあな藤樹」

「おう」

「こらっ、待たんか清水目ー！」

分かりやすく名前を付けるなら黒髪の爽やか高校生かな。名前は清水目 玲藍りょうらん。まず最初に思ったのは名前覚えるのに時間がかかった事。苗字も名前も難しく、特に清水目すずめなんか絶対読めない。本人

も一発目で名前を読めた人はいないらしい。そんな清水目は清水目家第28代。お父さんは某電機メーカーの副社長。お母さんはファッション雑誌の編集長。その為、彼の家は超大豪邸。東京ドームの半分の土地を持ち、別荘が世界に三件ある。更にコイツは超イケメン。前、東京に遊びに行った時、色んな場所でスカウトされた経験を持つ。高校でも女子にモテモテ。男子から見たら羨ましい存在だ。清水目は荷物を背負って教室を飛び出た。その後を志原が追う。

「ったくあいつ等は…」

あ、俺の名前を言うのを忘れてたね。俺の名前は藤樹 後ご。ごくごく普通の高校生。自分であれだけど名前を付けるなら……一般人。「そんじゃあ、俺もそろそろ帰るか」

教室の電気を消し、校舎と校舎を繋ぐ渡り廊下を歩く。

外を見ると真っ暗。街灯で照らされている枝葉が揺れている。これは寒そうだ。

階段を降りて北校舎三階。すると一室だけ電気が点いていた。こんな時間まで点いているとすれば恐らく生徒会室だ。多分そろそろ体育祭が始まるからその準備だろう。生徒会室は前にも言ったけど、北校舎三階の端、俺らがいる教室は南校舎四階。この学校は主に教室は南校舎。生物室、音楽室そしてコンピューター室などがあるのは今いる北校舎だ。この校舎は出来て30年近く経つ。なんせトイレを見れば一発で昔を感じる。例えば男子トイレは小便した後、ポタンを押して流すのが普通かと思うが、この校舎にそんな物はない。便器の上にタンクがあり、そこから一斉にその階にある便器に水が流れるのだ。大便は流石に一個ずつ流すのが付いている。

そんな事を話している間に一階に到着。靴に履き替え、スリッパを自分のロッカーに入れる。

「さみいー」

玄関を開けると、外は予想以上に寒かった。

「駅まで行くのめんどえなあ」

手で反対側の腕を擦らしながら駅まで歩く。

駅に到着し、ホームの椅子に座る。

「早く電車来ないかなあ」

風が異常な程強い。凍え死にそうだ。

「あれ？」

ふと右を見ると、坂倉さんが立っていた。

坂倉さん：やっぱり生徒会の仕事してたんだな。

暫く見ていると坂倉さんも前の俺のように、反対側の腕を掴んでいた。すると坂倉さんもこっちを見た。

「あっ」

「ふ、藤樹君!？」

互いに目と目が合った。

「坂倉さん。今日も生徒会の仕事？」

「う、うん」

「大変だね。こっちに来なよ、立っていると下から風が入って寒いよ?」

「そ、そうだね」

坂倉さんは俺の隣に座る。今駅に居るのは俺と坂倉さんだけだ。

「さ、坂倉さん大変だよな。進学もあれでしょ? 大学だっけ? 生徒会の仕事をしてて大丈夫なの？」

「…正直今、 に行けるか分からない。勉強したいんだけど、でも生徒会の方もほっとけないから…」

「頑張り屋だね。サボっちゃえば？」

「だ、ダメだよ。あたし副会長だよ。副会長がサボっちゃ…」

「やっぱり真面目だね、坂倉さんは。でもたまには自分の事にも力入れた方がいいと思うよ。まゝこんなバカな俺が言う事でもないけどさ」

「……」

坂倉さんは下を向く。

「あーごめん。傷ついた？」

「ううん。心配してくれてありがとう」

「そういえば、今日何人で仕事してたの？」

「三人…かな」

「三人!？だって役員で就職で内定貰ったやつとかいるでしょ？」

「それがなかなか皆集まってくれなくて。きつとなんか忙しいんだよ」

「そんなわけない。あいつら今頃遊んでるって」

「でも…」

「最悪だよそいつら。俺で良かったら手伝おうか？」

「いいよ。藤樹くんだって進路で忙しいんでしょ？」

「ま、まあね。でも受かったら手伝いに行くよ」

「ありがとう。でもその頃には終わってるから」

「そ、そうなの!？」

「うん、殆ど今仕上げに入ってるから」

「そもそも何作ってんの？」

「体育祭のアーチ作製」

「そっか。もうすぐ体育祭だもんね。結構かったでしょ？」

「そんなかかってないよ。え〜と確か…二週間くらいだったかな？」

「それかかってる!充分かかってる!」

「そうかなあ？」

「そうだよ!」

その後も会話が続く。やっぱり好きな人と話すと楽しい。

「（メロディ）鷹^{たかえ}江方面、電車が参ります。白線の内側までお下が
りください」

「電車来たみたい。じゃああたしはここで」

「うん。また明日」

俺は坂倉さんと真逆の新田^{にった}方面。電車がホームに到着し、ドアが
開き、坂倉さんは入る。帰省ラッシュみたいで、多くの人が乗って
いた。

プシュー

ドアが閉まり、電車は出発する。俺はその電車を見えなくなるま
で見ていた。

翌日、SHR（朝の会）開始十秒前。

「ハッハッハッハッ…」

俺は階段を上がり、渡り廊下を歩く。

ガラガラガラ

キンコンカンコンコン

「ハアハアハア…なんとか間に合ったあ」

ドアに手を当て、呼吸を整える俺。

「間に合ったじゃない！はよ席に着け！」

顔を上げると、老眼鏡かけた50代後半位の担任の江島先生が俺に注意した。

「はあい」

俺は一番後ろの窓側の席に着く。

「礼」

当番の人が言い、皆着席する。

「おまえ、たまには早く来いよ」

「るっせえ、朝早く起きねえんだよ」

顔を机に着け、隣に座っている志原に小声で言う。

「それじゃあ今日の欠席者は…坂倉は風邪で休みだ」

珍しい…坂倉さんが休みなんて。

そんな事を思いながら荒い息を鎮める。

一時限目は数学。数学の今年来た25くらいの若い女の先生、桐林先生が何やらプリントを持って教室に入ってきた。

「それでは今日はテスト一週間前なので小テストを行います」

「…えー…」

皆が同じ言葉を言う。

「えーじゃないの。ほら後ろに回して」

先生は一番前の人にプリントを配る。

俺の所にもプリントが配られた。表裏ビッシリと問題が書かれていた。

「これを解けば本番八割はいけます。終了十分前に解答用紙を配るからそれまで頑張って下さい。教科書とか見ても構わないから。それでは始めっ」

皆一斉に書き始める。その後、先生は教室を退出した。

十分後。ずっと問題を解いていた俺は辺りを見回す。

「うわぁ〜殆どの奴寝てるし」

一番後ろの席からはよく見える。三割くらいの奴が明らかに寝てる。しかも全員就職内定者。そして隣の志原も。志原は整体師関係の専門学校を既に合格…というか書類提出で受かったんだけどね。

「決まったからって寝んのかよぉ」

決まってる俺にとっちゃあ何故かこういう小テストでも寝てはいられない。一問一問正確に解いていく。

「終わったぁ」

解答が配られる四分前に全ての問題を解け終えた。

時間になり、先生が解答を配る。教科書等を見たからもあって一問だけ不正解だった。いつも平均点な俺にとっては上出来だ。まっ、教科書見たから高いに決まってるか。

「コイツまだ寝てやがる」

にしても隣の志原は夢の世界へ入ったようだ。本当に呑気な奴だコイツは。

一時限目が終わり、二時限目は体育。男子が徐々に出る中、志原はまだ寝ていた。これは流石に起こさないと。

「おい、志原。起きろ!」

「ムニヤムニヤ…パフェが食べたい…」

パフェ!? 駄目だこりゃ。

「どうしたの?」

話しかけてきたのはショートカットでスポーツ万能の巨乳なクラスメートの真留^{まじめ} 芽吹^{めぶき}が言う。元女子卓球部部长で全国大会に出場

した事がある。

「ああ真留さん。コイツがさあ、見ての通り、爆睡しちゃってさ…」

「こんなクソゲーほっとけば？」

「クソゲー……ね」

クソゲーとは勿論志原の事。理由は毎日のようにエロゲーだの18禁ゲームを教室でやっているからだ。何せ休みの日は睡眠時間を削ってまでやるというある意味気持ち悪い奴。その事を俺ら男子が広げた結果、殆どの女子が志原の事を「クソゲー」と陰で呼ぶようになった。

「そうか？じゃあそうするわ。寝てるコイツが悪いんだし」

「そうそう。まあ着替えてる最中に起きたらぶっ殺すけどね」

真留の目付きが肉食動物が獲物を捕らえるような目に豹変した。

「うわぁ目が怖い」

俺はさっさと教室を出て、男子の着替え室である武道場へと向かった。

「ムニヤムニヤ…ン？」

志原が目を覚ました。

「テスト終わったあゝってあれ？」

志原の目の先には女子が着替えてる最中だった。

「…「キヤアアアアアアアア！！！！！！」」」

女子の声が志原の鼓膜にガンガン伝わる。

「クソゲー、何してのお？」

既に運動着に着替えた真留が指をボキボキ鳴らしながら言う。

「えっ、ななな何？どうなってるの！？」

「このお…ド変態がああああ！！！！」

バチン

真留の掌が志原の頬にクリーンヒット。その威力は卓球で鍛えられた腕とあって、男子にビンタされるより痛い…筈。

昼休み。

「今日は散々だ」

志原がぐったりと寝る。

「仕方ないだろ。寝てたおまえが悪いんだから」

俺はバッグから弁当箱を取り出し、蓋を開ける。

「今日も相変わらず冷凍食品で揃ってんな」

俺は独り言をブツブツ言う。

「つーかあいつが悪いんだよ真留。あんな思いつきりビンタしなくたっていいじゃねえか。見てよ！まだ若干あいつの跡が残ってたんだぜ」

確かに右頬にくつきりというほど残っている。流石加減無しの真留だな。

「いいから飯食えよ。じゃねえと新作ゲームできなくなるんじゃないのか？」

「おう！そう言えばそうだった」

志原は急に起き上がった。

「今日は新作ギャルゲーをやるために来たんだった！」

おいおい…学校を何だと思ってるんだコイツ。

「藤樹もパッケージ見るか？これチヨ一萌えるぜ」

志原からパッケージを渡された。うん、ギャルゲー特有の絵だ。

「ま、おまえがやりそうなゲームだな」

俺はパッケージを返す。

「これチヨ一萌える筈だぜ？シリーズ最高傑作だってネットで騒動になってたし！」

「分かった分かった。いいから飯食うぞ」

「しかもさ今回付録がパナインだよ。CDとか限定グッズ…くうヤツベエ」

志原のテンションが徐々に上がっていく。こうなると処理が面倒になってくる。だからこういう時は無視が一番。

「まず、麗奈ちゃんがあーして、このはちゃんのあれがあって、そしてなんてったって珠里ちゃんのこと…」

ああーうつぜえコイツ。ガチで殺したいぐらいだ。

「藤樹」

「おう清水目^{すずめ}」

丁度良い所で清水目が来た。

「どうした？」

「おまえってやっぱ凄いやな」

「ああ、志原^{「イッ」}の事だろ？」

「こんなクズの隣でよく…」

「まあ仕方ないさ。たまたま場所が悪かったただけさ。今は窓側だから外の景色を見てなんとかなるけど、もし廊下側だったら俺は死ぬな」

「確かに俺も死ぬな。つかそう言う事なんてどうでもいい。藤樹、先生が呼んでたぞ」

「先生？」

「ああ、なんか重大なお知らせだよ」

「重大な？」

俺は席を立ち、階段を降り、二階にある職員室へ向かった。

「失礼します」

「おう藤樹、ちょっと来てくれ」

一番奥の端にいる担任のもとへ行く。

「突然ですまないが、放課後にノートを見せてくれないか。おまえいつも真面目にノート取ってるだろ？」

「真面目かどうか分かんないすけど。俺ので良ければ」

「おまえので良い。放課後、俺の机の上に置いていてくれ」

「分かりました。失礼しました」

先生確か環境だったよな。ロッカーにあるかな？

そんな事を思いながら歩いていく。

「あ、あった」

ロッカーにあった事を確認し、教室に入る。

「おっ、どうだった？」

席に座っている清水目が喋る。

「ノート見せてくれたってさ」

「そうか。おまえ真面目だからなあ」

「真面目じゃねえよ」

歩きながら、俺は自分の席に向かう。

「おっ、藤樹。今やってんだけどさ、マジヤバイ」

志原は俺が座った瞬間携帯ゲームを置き、再び俺にゲームのことを喋り始めた。

さて、飯食うかな。

隣が喋っているのを耳から反対の耳へと通過させながら俺は飯を食う。

放課後。ノートを先生の机に置き、今日はゲームせずに早めに帰ることにした。

「（メロディー）新田方面、電車が参ります。白線の内側までお下がってください」

こんな早く乗るの、部活入る前以来かも。

電車に乗ると、いつも乗る１８時に比べ人はあまりいなかった。

その頃坂倉家。

二階の自分の部屋で美夜は寝ていた。薄いピンクの壁の周りには色んなぬいぐるみが置いてあり、本棚には少女漫画やCDやアルバ

ム。壁には帽子などが飾ってあった。

ピピ、ピピ、ピピ

体温計を取り出すと、三十八度一分。少し熱があるくらいだ。

「ちよつと水でも…」

家には誰もいないため、一階のキッチンまで行かなければならぬ。
い。

「うっ」

起き上がり、数歩歩くと頭痛が起き、手を頭にあてる。そして時々めまいがする。何だろう…全然前がハッキリと見えない。

壁に手を当てながらゆっくりと歩き、階段も一段一段ゆっくり降りる。

いつもなら部屋を出てキッチンまでは十数秒で行ける筈が今回は二分以上かかってしまった。なんとかキッチンに到着し、コップに水を入れる。

ゴクゴク

「ハア、ハア、ハア」

二杯ほど飲み、再び部屋に戻る。また階段を一段一段ゆっくり登る。足に重りを付けているようで重く感じる。

「ふう〜」

なんとかベッドに到着し、布団に入る。

翌日も、その次の日も坂倉さんは欠席。

「大丈夫かなあ」

授業中、俺は携帯を開き、先生にばれないように坂倉さんにメールを送った。いつメアドをゲットしたかっていうと、高校二年生の時、クラスの文化祭係になった時に連絡を取り合うという事でゲットしました。

内容は「最近学校来ないけど大丈夫？」

数十分後。

ブー、ブー、ブー

制服のポケットに入れてあった携帯電話のバイブが振動する。坂倉さんからだ。

「大丈夫。明日辺りには行けそうだから。心配してくれてありがとう」

そっか。俺は少し安心した。

「あまり無理はしないでね。じゃあ明日」

俺は送信ボタンを押す。

携帯をポケットにしまい、俺は急いでノートを執った。

その夜、坂倉家。

ガチャ

「美夜、具合はどうだ？」

父が美夜の部屋に入る。

「あ、お父さん。大丈夫だよ。薬を飲んだおかげで今は平気だよ」
ベッドに入りながら答える。

「そっか。もうじきご飯だから降りてきなさい」

「うん」

父が去った後、美夜の起き上がる。

「うっ、まただ…」

またしても激しい頭痛が襲う。しかし美夜はその内治るだろうと思っていた。しかし今回は何故か頭痛が長時間続き、一步步くの回数秒もかかってしまう程美夜に頭痛が襲う、時折しゃがんでしまう時もありながらなんとか階段を降り、リビングに入ったその時。

「あっ」

急に足の感覚が無くなり、美夜は倒れかけ始める。

ボタン

視界が真っ暗になり、美夜は倒れた。

その様子を数メートル先で父母が見ていた。

「美夜ッ！美夜ッ！」

父が駆けつける。

「おい、美夜！目を覚ませ！美夜」

父の声に美夜は反応しない。

「救急車を呼びましょ」

母は電話機で救急車を呼ぶ。

「もしもし、娘が倒れてるんです！今すぐ来て下さい」

ピーポーピーポー

数十分後。救急車は坂倉家に到着した。

三十分後、病院。

「緊急患者です。退いてください」

通路に美夜の乗せたストレッチャーは手術室へ向かう。手術室と書かれた看板が赤く光る。

「美夜、美夜！」

母は涙を流しながら、手術室前で止まる。父は何も言葉にすることとは無かった。

何十時間後。

手術室と書かれた看板の赤い光が消えた。
ガシャン

扉が開き、ストレッチャーに乗った美夜は二人の前を通り過ぎた。その後に医師が来て、二人の前で止まった。

「先生、美夜は…美夜は大丈夫なんですか」

喋った母と黙っていた父は立つ。

「お母様、お父様。美夜さんは

くも膜下出血です」

「く、くも膜下出血!？」

父は思わず大きい声を出す。

「そんな、美夜が…」

母は驚く。

「はい。それもかなり悪化しています」

「そんな…」

母はその場で座ってしまった。

くも膜下出血……脳の血管のトラブルが原因で起きる病気で、脳卒中の中で死亡率が高い病気。もともと脳動脈に何らかの弱い部分があり、通常の血圧そのものが血管壁を破るきっかけになる。特に脳動脈が二手に分かれているような場所で起こりやすい。三分の一は社会復帰、三分の一は回復するが重い後遺症、そして三分の一は死亡。

「一応応急処置はしましたが、別の場所で起こる可能性があるのです。一ヶ月は様子を見ましょう。尚今回で社会復帰は極めて難しく、重い後遺症が残るか、最悪の場合死も考えられます。しかし我々は必ず美夜さんを今まで通りの生活を送れるよう努力いたします。なのでご両親も美夜さんが助かるよう祈つといてください」

医師はそう言った後、二人の間を通り過ぎた。

翌日、美夜さんは学校に来なかった。

「おかしい。確かに今日行くって行ってたのに」
藤樹は心配になった。

放課後、坂倉さんにメールしようと試みた。しかし、無闇にメールするのも良くない。

「坂倉さんが戻るまで待つか」
携帯を閉じ、一人帰宅していった。

一方病院。

「ん…ん」

美夜は目を覚ました。辺りは真つ暗だった。

「ここは…」

暫くあまり景色は見えなかったが時間が経つことに見えるようになり僅かながら左右首を振った。

ガラガラガラ

美夜の両親が入ってきた。

「美夜！」

美夜が目覚めた事に気付いた両親は美夜のところに駆けつける。

「美夜！大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ…お母さん」

美夜は小声で応える。

「よかったあ」

母は涙を流す。

「美夜…よかったなあ」

続けて父も涙を流す。

「なにさ二人そろって泣いて」

聞こえるか聞こえないかのくらいの声で言う。

「あなた、くも膜下出血で倒れたのよ」

「くも膜下…出血？」

「そうよ。お医者さんからあなたは深刻だって言われたからお母さんどうしようかと…」

「母さん。あまり美夜に負担かけさせるような事を言つな」

「ああ…ごめんなさい。だって…生きてくれただけでも嬉しかったんですもの」

「おいおい、泣くなつて」

と言いながらも父も美夜の手を握りしめる。

「心配かけて…ごめんね」

美夜の目にも涙が零れる。

一カ月後。

「また遅刻やぁーーーー」

相変わらずギリギリで登校する藤樹。

ガラガラガラ

「ハア、ハア、ハア…セーーフ」

キンコーンカーンコーン

先生はまだ来ていなかったので安心して席に戻る。

「ハアハアハアハア」

俺はいつも通り座り、机に額を付ける。

「藤樹くん」

「はい…何ですか？」

聞こえる声に顔を上げる。

「さ、坂倉さん！」

目の前には坂倉さんが立っていた。

「おはよ、藤樹くん」

「おおお、おはよう」

動揺しまくる俺。

「ちよつと用事あるから放課後屋上に来てくれない？それじゃあ」
坂倉さんは俺に耳打ちでそう言い、自分の席に戻っていった。つか坂倉さん学校に来てたんだ……

「おい、藤樹。坂倉と何話してたんだ？おい！おい！」

俺は呆然としている。志原は藤樹の体を揺する。

「んあ？」

やつと我に帰った藤樹。

「んあ？じゃねえよ。坂倉と何話してたんだ？」

「あ……ああ。仕事の依頼だよ」

「おまえに仕事？じゃなくて告白だろ？」

「ギクツ！こんな俺にあるわけないだろ？」

「そつかあ？目が泳いでるぞ」

「バカ野郎！ねえもんはねえよ」

「はいはい」

志原はニヤニヤしながら席に戻る。

あの話の内容は何なんだろう？

結局その事で一日中勉強に集中できなかった。

「よし、これで終わりだ」

「起立、礼」

当番が号令をかけ、放課後になった。

すると同時に。

ブーブーブー

携帯が振動する。坂倉さんだった。

「今日の午後5時に屋上で」

ヤバイ……これは告白じゃねえか！絶対にそう！絶対にそうだ！
心拍数が上昇し始め、顔が赤くなっていく。

「藤樹、通信対戦しようぜ」

志原と清水目が来た。

「お、おう」

「何おまえトマトのように赤くなってるんだ？」

「ちよつと熱が…でも大丈夫だ。ささ、やろうぜ」

「おまえ何か今日変だぞ。授業中ぼけーっとしてたし」

「大丈夫だって。早くやろうぜ」

「だから志原、おまえも攻撃しろって」

「俺っちは弱い。だから採掘じゃい！」

「せこやろうが」

清水目が思わず言葉を零す。

「清水目、あいつは一生独りでつまらないゲーム生活を送るだけだ。俺らだけでもやっちまうぜ」

「って言ってもな藤樹。コイツ前より強くないか？」

「そうか？これ志原のやつだからな。志原、これレベル何？」

「6」

「「6!？」」

驚く俺と清水目。

「おまえ何6って！おまえいつそんなに…」

「裏ワザ」

志原がピースサインをする。

「ふざけんじゃねえよ！」

「そつだ！それで独りだけ採掘とか…」

二人は段々怒りへと変わっていく。

「まあまあ二人共、ゲームに集中集中。あ！ルドウーラ石じゃん。

超レアGETー！」

「「志原！……」」

二人はゲームを一時中断し、立ち上がった。

「おい、藤樹清水目……」

「清水目、これからやる事分かってる？」

「勿論さ藤樹」

「な、何するんですか……」

「ちよつと目を瞑ってな？」

「ま、待って……俺っち何にもしてないよ」

「「大人しくしてろよお」」

「イヤアアアアアア！！！」

志原の声が俺ら以外いない教室内に響いた。

五分後。

「ンンン……」

「これで完璧。さて再びゲームやろうぜ清水目」

「OK」

志原は口をガムテープで止められ、更に両手両足を紐やガムテープで締められ、身動きが取れなくなった。

「ンンン！（助けて！）」

「さあて、今度は何する？」

「こいつどうだ？レベル6のボス」

「マジか？まあいいぜ」

「ンンンン……（無視しないでえー）」

結局三十分間。志原はその状態が続いた。

「あ、こんな時間か」

一段落し、時計を見ると午後4時58分だった。

「ちよつと俺トイレ行ってくるわ」

「おう」

実際はトイレに行くわけでもなく、俺は渡り廊下を走り、階段を

上がっていく。屋上に繋がる階段を登りきり、深呼吸をし、扉を開ける。

ガチャ

「うわっ、寒っ」

夕日が綺麗だが、そんな事より風が寒い。この高校は都会にあるため、敷地はそんなに無い。そのため屋上にプールがある。

「坂倉さんいるのかなあ？」

プール周辺を歩いていると、端っこに誰かがいる。

「藤樹：くん？」

坂倉さんの声が聞こえる。きつと坂倉さんだ。

「坂倉さん。何？こんなところに呼んで」

「実は…藤樹くんに聞きたい事があるんだ…」

坂倉さんはその後、なかなかその先の言葉が出ない。

「ふ、藤樹くんってあたしの事！」

坂倉さんは急に大きな声を出す。やっぱりこれって…これって…

告白！？俺の鼓動が最高潮になる。

そんな事を考えていると。

ボタン

「え？」

妄想から現実に戻ると坂倉さんが急に倒れた。

「坂倉さん！坂倉さん！！」

俺は近寄り、坂倉さんの意識を確認する。

「意識がない。急いで保健室に連れかかなきゃ」

俺は坂倉さんを背負って、保健室に連れて行く。

「先生！」

「どうしたの？」

保健の綿内先生が振り向く。

「先生、坂倉さんが倒れたんです」

「ちよつと見せて」

坂倉さんをベッドに寝かせ、先生は聴診器で確認する。

「心臓が…動いてない」

「心臓が!？」

「君、今すぐ携帯で救急車を呼んで!」

「は、はい!」

俺は携帯で電話する。先生は人工呼吸を行う。

数十分後。

ピーポーピーポー

「何だ？」

「おい!救急車だ」

「誰か倒れたのか？」

皆窓から保健室を見る。勿論志原や清水目も。

「誰が倒れたんだろうな」

「分かんねえ。そっぴや藤樹は？」

「まさかあいつじゃ…」

「そんなわけないだろ」

「おい、誰か運ばれるぞ」

保健室から坂倉が運ばれる。

「坂倉じゃん!あいつ今日登校したばっかじゃ…」

「やっぱ登校しちやいけなかったんだよ」

二人で話し合っている間に藤樹も救急車に入る。そんな中藤樹は…

「坂倉さん!坂倉さん!」

俺は坂倉さんに声をかける。

「君は少し退いていなさい。後は私たちに任せなさい」

俺は救急車の端っこでただ坂倉さんを見ることしか出来なかった。そして俺の頭に最悪の事態が過ぎり始める。

後編（前書き）

だいぶ遅れて申し訳ないです。後編です。

後編

「道を開けてくれー」

ストレッチャーで運ばれている美夜は手術室に入れられた。手術室のランプが赤く光る。

「坂倉さん…」

俺は座って両指を交差して握り、意識が戻る事を祈るしかなかった。

廊下から医師だろうか。白衣とマスクを付けた人が藤樹に近づき、目の前で止まる。

「君だね。発見者は」

「はい、そうですけど…」

「患者は現在凄い悪化している。患者の病知ってるか？」

「はい、くも膜下出血…ですね？」

「そうだ。患者は一ヶ月前にもここにくも膜下出血で緊急搬送されたんだよ。その時はかなり悪化してたよ。もう少しで死だったからね」

「えっ…死…ですか？」

突然の言葉に驚く。

「そう。その時は私が担当して、なんとか死まではいかなかったよ。でも重い後遺症が残るって思ったんだ。でもその事は…両親には言えなかった」

医師は少し間を置く。

「しかし患者は凄かった。後遺症どころか普段の生活に戻れるくらいの猛スピードで回復していった。正直私も驚いたよ。あんだけ重症でここまで回復するとは思わなかったからね。そして一週間前に退院した。あの時は正直心配だった。けど報告が無かったから安心した。しかし今日患者は再び入院。やっぱりそう簡単にはいかなかったみたいだ」

医師は床に座りこむ。

「すいません。今回は何故坂倉さんの手術をしなかったんですか？
だって一度助けた…」

「助けてなんかいないさ。助けるといいうのは治ってから一生二度と同じ病気を患わないことを言うのさ。けど今回再び入院。私は助けられなかったのさ。だから今回は違う医師がやっているんだ」

医師の言葉に応えることが出来ない藤樹。

ウーン

自動ドアから坂倉さんの両親が駆けつける。

「先生！美夜は…美夜は！」

母は医師に言う。すると医師は立ち上がった。

「今手術中です」

「そんなの分かってるわよ。今回はどうなんですか！」

「今回は別の場所で破裂したみたいです」

「そ…そんな」

母は座り込む。

「先生、美夜は助かるんですよね！？」

父が言う。

「わかりません。今回破裂した場所は前回の破裂よりもかなり酷くて…助かるかどうか…」

「あなたそれでも医者ですか！」

坂倉の父は医師の服を掴む。

「お、落ち着いて下さいお父様。今は意識が戻る事を祈るべきなのではありませんか？」

「クッ…」

坂倉の父は服を離す。

「大丈夫です。私たちを信じてください。そうすればきっと神様が助けてくれます」

坂倉の父は両手をギュッと握り、顔を下に向けた。俺はそれをただ見ることに出来なかった。

十時間後、午前三時。

眠気が襲う中、俺と反対側にいる坂倉さんの両親は座って待っていた。

「坂倉さん大丈夫かなあ」

脳裏にそう思っていると。

ブシュー

手術室の扉が開いた。開くと同時に全員立ち上がる。中から医師が出てくる。

「手術は無事成功いたしました。しかし…」

「何ですか？」

坂倉の母が心配しながら言う。

「美夜さんは……重い後遺症が残る可能性が極めて高いです」

「後遺症って…例えば」

坂倉の父が尋ねる。

「一番高いのは正常圧水頭症という病気です。これは出血後一ヶ月位に起こり、脳室という脳内にある液体の循環する部屋があるので、その中に液体が貯まり、脳室が拡大してしまい、精神機能障害や歩行障害が進行する恐れがある病気です。しかし後遺症よりもまだ死という可能性も考えられます。何せ二ヶ月目なので、更にまた別の場所でも起これば死という可能性もございます」

医師は解かりやすく説明した。

「死…ですか」

しかし坂倉の父は後遺症よりも死の方にしか頭に残っていないかった。まだ十八歳の娘が死か生の選択肢の中にいるのだから…

「はい、なのでまた一ヶ月間様子を見て、後遺症が無ければ二週間自宅での生活を行い、そして最終検査で問題無ければ登校許可を出します」

「そうですか」

坂倉の父に元気は無かった。俺はその様子を見て口を開く。

「諦めちゃ駄目です！元気出してください。坂倉さんだってまだ生きようと頑張っているんです。お父さんお母さん達がへこんでどうするんですか！まだ生きる希望は残ってるんです。坂倉さんの奮闘を無駄にしてどうするんですか。ちゃんと応えるじゃないんですか？」

俺は精一杯今言える事を言った。すると坂倉の母が涙を拭きながら立ち上がる。

「そうね。あなたの言う通り。ここで泣いてたら折角頑張っている美夜が可哀相だわ。ありがとね」

続けて坂倉の父も口を開く。

「そうだな。おまえの言う通りだ。ありがとう」

「いえ、僕はただ坂倉さんがまた元気に来て欲しいだけですから」
俺の顔は少し笑顔になった。

「そうです。君の言う通り。一日でも早く回復する事を我々は祈りましょう。今日はもう遅いのでご帰宅ください」

もう一人の医師の言う通り、俺と坂倉さんの両親は病院を出た。

外は真っ暗で、風が冷たく吹いていた。

「君、名前は何て言うんだ？」

坂倉の父が言う。

「藤樹 後と言います」

「後くんか。家まで送ろうか」

「いいんですか？」

「ああ構わないよ」

「すみません。お願いします」

俺は坂倉さん家の車に乗った。

「ここです」

俺の家の前で車は止まった。まだ灯りが点いている。

「すみません。ありがとうございました」

車のドアを閉め、車は去っていった。

「きつと怒られるだろうなあ」

家の方を見て、俺は思う。

ガチャ

「ただいま」

「後！あんた何時まで病院にいたの！」

母は玄関にいた。

「知ってたの？」

「先生から電話で知ったわよ。それで、坂倉さんは大丈夫なの？」

「ああなんとかね。でもまだ危ないかもね」

「そう…あなた明日学校なんだから早く寝なさい」

なんだ…俺の事はあまり心配してないのね。

そんな事を思いながら俺は二階へと上がり、布団の中に入って寝る。

数日後の放課後。面接試験二日前。俺は職員室で先生と練習して

いた。

「どうして我が校を受験しようとしたのですか？」

先生は紙を見ながら言う。紙には俺が書いた質問が書いてある。

「はい、私は小学生の時から音楽が好きです。私はボーカリストになりたくて、貴校は特にボーカルに力を入れてるという事で、私もボーカリストになって人々に感動を与えられるような人になりたいのでここを志望しました」

「うん。この学校はボーカルに力を入れてるのか？」

「はい、インターネットやパンフレットに書いてありました」

「そうか。じゃあ好きなボーカリストを教えて下さい」

「はい、私はこの学校第24期生のポルノグラウンドの外賀^{とが}さんが好きです。外賀さんの歌詞には毎回感動を受け、8枚目のシングル『風のように』ではなかなか告れない男が、風のようにさら々と近づき、彼女に告白したいという恋愛物語を書いた歌詞で、私はその歌詞に感動しました。その他も感銘を受ける曲ばかりなので私は外賀さんが好きです」

その後も質疑応答が続き、担任に一応OKの許可がおりた。

そして翌日金曜日。俺は授業を半日受け、午後は荷物を持って、高速バスで東京へ行った。

夜、宿泊予約しておいたビジネスホテルに行き、カードキーを貰う。エレベーターで上がり、カードキーを差しこむと鍵は解除され、部屋に入る。長い廊下を歩くと、ベッドとテレビが置いてある10帖程の部屋だった。もう一度廊下を歩くとユニットバスへと入るドアがあり、反対側は洗面台が置いてあった。

「いよいよ明日か」

ベッドに仰向けになりながら言う。

「坂倉さんにメールでもしてみようかな？」

ピピピピ

俺は携帯を開き、坂倉さんに送るメール文を作成する。流石に返信はないと思うけど取りあえず。

「よし、これでいいか」

カチャ

送信ボタンを押して携帯を閉じ、布団の中に入った。因みに内容は「今東京にいます。明日は面接試験です。受かるよう頑張ります！」

面接当日。会場である専門学校に着く。6階建てのビルで、結構真新しい。

中に入るとホテルのロビーみたいに広い部屋で、その中には多くの人が集っていた。同い年もいれば、明らかな年上もいる。まあ専門学校なんてこんなもんか…。

そう思いながら、受付に行く。

「面接カードをお見せください」

俺はカバンから面接カードを取り出す。

「A - 062……藤樹さんですね」

「はい」

「試験会場は4階のB室です。あちらのエレベーターでお上がりください」

「分かりました」

俺は面接カードをしまい、奥のエレベーターの列に並ぶ。暫くして入るが、ぎゅうぎゅう詰めで一番奥まで押された。4階に到着し、強引に退かしながら降りる。廊下を歩くと一人の先生らしき人が入り口で立っていた。

「こちらが控え室になります。同じ番号が書いてある席にお座り下さい」

中に入ると多くの人が座っていた。1つの長テーブルに二人座っている。全体を見るとおよそ25人くらいはいる。

「A - 062、A - 062……あつた」

長テーブルが3つ横に。縦に10個置いてある。俺は真ん中の長テーブルの6番目の通路側にA - 062を書いてある紙を見つけ、荷物を置いて座る。隣はちよび髭を生やした人が座っていた。

暫く待機していると、

「それでは皆様……」

顔を前に向けると、若い先生が教壇の上に立っていた。

「本日は我が専門学校へ来ていただき有難うございます。さて、早速ですが面接方法を説明します。面接時間は5分間で、一対一で行います。番号が呼ばれましたら、必ず荷物を持って退出して下さい。試験終了後は速やかに控え室に戻る事無くエレベーター又階段がある方へ向かって下さい。ただし、トイレの場合は私たちに言ってから退出して下さい。荷物は背負ったまま面接室へお入り下さい。では10分後から面接を始めます。順番はこのような形で行います」すると先生はホワイトボードに紙を貼り出した。俺は三つの部屋の真ん中の二番部屋で8番目だった。

面接が始まり、次々と呼ばれ、人が控え室から消えていく。そして、

「次、B - 061、A - 062、U - 063番の方」

受験番号が呼ばれ、俺はカバンを持って席を立つ。

「B - 061番の松田さんは1番のお部屋、A - 062番の藤樹さんは2番のお部屋、U - 063番の柳平さんは3番のお部屋になります」

廊下を歩いていると、ドアの前には番号と椅子が置いてあった。

俺は2番と書いてある紙のドアの近くの椅子に座った。

緊張するうゝ。

近づいていくにつれ、心臓がバクバクになる。

ガラガラ

「失礼しました」

前の人が出てきた。

いよいよ来たかあ。

緊張がMAXになりながらも俺は席を立ち、ドアの前に止まる。

スウゝ、ハアゝ

一回深呼吸をした。

コンコン

「どうぞ」

向こうで女の人の声が聞こえた。

ガラガラ

「失礼します」

一礼し、ドアを閉める。目の前には女の人とおじさんが座っている。

「受験番号A - 062、藤樹 後うしろです。よろしくお願いします」

「どうぞ、お座りください」

「失礼します」

俺は椅子に座る。やべえ心臓が張り裂けそうだ。

「それでは面接を始めます佐々原君。あまり緊張しなくていいからね。じゃあまずどうして我が校を志望なさったのかしら」

「はい、私は小学生の時から音楽が好きです。私は色んなアーティストを見て、貴校は特にボーカルに力を入れてるという事で、私もボーカリストになって人々に感動を伝えれるようになりたいのでここを志望しました」

「なるほどねえ、じゃあここを卒業した有名なボーカリストが我が校には多々いるの。三人程あげてくれないかしら」

「はい、ポルノグラウンドの外賀とがさん、オレンジ魂の井上さん、元SKY BLUEの福内さん、渡邊さんです」

「SKY BLUEの福内さん、渡邊さん…懐かしいわね。彼たちは確か第5期生よね。田ノ上さん？」

「そうですね。君良く知ってるね」

「はい。大好きです」

SKY BLUE。ボーカルの福内さん、渡邊さん、ギターの池間さん、ベースの新宮さん、ドラムの島原さんによる国民的バンド。1983年デビューでこれまでに多くのヒットソングを歌ってきた。しかしグループは2008年解散した。

「そうですね。じゃあ君はボーカルを目指すと」

「はい」

「目指す人は誰ですか？」

「多くいますが、ポルノグラウンドの外賀さんみたいに歌詞と歌声で皆さんを感動させたいと思います」

「分かりました。ちょうど時間ですね。これで終わります」

「ありがとうございました」

俺は席を立ち、ドアをスライドさせ、

「失礼しました」

と言い、ドアを両手でゆっくり閉めた。

「ハア、やっと終わった…」

そんなことを思いながらエレベーターへと歩く。

外へと出て、俺は深呼吸した。

「なんかあつという間だったなあ。結果を待つしかないか」

俺は新宿のバスターミナルへ歩いた。

二日後。校舎内

「うーす」

「おはー藤樹」

教室に入ると志原が片腕を挙げて挨拶をする。志原は片耳にイヤホン、そしてゲームを片手に持っている。まあどうせ例のアレだろう…

「それ何のゲーム？」

分かりきった感じの声で問う。

「これ？昨日発売したゲームだぜ。藤木もやってみつか？」

画面を見ると、男と女の会話シーンが流れていた。

ハハハ…（やっぱりか…）

「俺いいわ」

俺は遠慮気味に言う。

「んな事言っなって、ほらイヤホン着けて聞いてみ？マジやべえから」

イヤホン渡され、仕方なく付ける。場面は屋上。

(女)「ねえ、あなたは私のこと…どう思ってるのよ」
照れながら女は言う。

(主人公)「ど、どうって言われてもなあ…」

主人公らしき男は手を頭の後ろにあてながら言う。

(女)「……答えて欲しいの。あたし…」

(主人公)「…」

(女)「…あたし…」

女は顔を下に向ける。

ドクドクドク

向けたと同時に女の心拍数の音が聞こえる。

(女)「あなたのことが……」

(主人公)「……」

(女)「す……す…」

ブチッ

俺はイヤホンを外した。

「どうした佐々原？」

「おまえ、よくこんなゲームをしてられるな？」

「そう？こんなの普通だけど…」

「……」

俺は志原の言葉に愕然とした。
「コメント」

「普通…か。じゃあ俺荷物置いてくわ」

おまえなんか一生おかされてる、この二次元野郎！
俺は心の中でそう叫んだ。

夜、手術を終えた美夜は酸素マスクを付けて寝ていた。

そして別部屋で、両親は医師から宣告される。

「坂倉さん、誠に申し訳ないのですが美夜さんの病状が急に悪化しました。今私たちは出来る限りの事をしました。しかし…」

医師は突然話を止める。そしてなかなかその後を言わない。

「大丈夫です。私たちは覚悟してますので」

父親がそう言うと、医師は口を開く。

「お父様お母様、これから大事な事を言うので心して聞いてください。美夜さんは……」

医師は唾を飲み込んだ。そして、

「……余命……二週間です」

医師はそう告げた。

「に、二週間!？」

坂倉の母親は口を震わせながら言う。父も目を全開させる。

「はい」

「そんな…そんな…」

思わぬ言葉に母親は両手を顔に当て、泣きだした。父親も思わず涙を流す。

「他に…治療法はないんですか!」

父は顔を上げて言う。

「私どもや世界の医師達とインターネットを通じて聞いたんですか。無理だと…」

「そんな…」

父は愕然とする。

翌朝、美夜はゆっくりと目を開ける。

目を開けると、両親の姿が映っていた。

「美夜、起きたか」

「急にどうしたの…あれ？」

美夜は掠れ声で言う。そして自分が酸素マスクをしている事に気付く。

「美夜、突然ですまないんだがおまえに伝えなければならない事がある」

「何？」

「心して聞け。おまえは」

「まさか、余命？」

「あ…」

美夜のお驚くべき言葉に口が開いたまま止まる父親。

「あなた…」

母親は父親に言う。

「やつぱりそうなんだ…お父さん…あと何ヶ月なの？大丈夫…あたし、覚悟してるから」

「そうか。おまえは……」

父親はその続きの言葉が出てこない。それを見た母親は口を開く。

「美夜、あなたは余命二週間よ」

「おまえ…」

「…そう。あたし、余命二週間なんだ」

美夜は笑顔で応えた。

「大丈夫だよ。もう大体こういう事言われるって分かってたから」

「そ、そう…じゃあお母さん達、仕事に行くね」

「うん、行つてらっしゃい」

両親は部屋を出た。

「あと…二週間なんだ」

美夜の目から涙が零れる。

数日後、藤木はと言うと…

「ハアハアハア」

朝からチャリを漕いでいた。

「坂倉さんに…坂倉さんに伝えなきゃ」

俺は病院へと向かった。

「着いた」

自転車を止め、俺は息が切れながらも病院へ入っていった。同時に坂倉さんの両親も病院を出て行った。すれちがったが何も話す事無く俺は受付へ向かった。

「すいません。佐々原なんですが、坂倉 美夜さんと面会したいのですが」

「誠に申し訳ないのですが坂倉さんは現在…」

「どうしても会いたいんです。お願いします！」

俺は一礼をした。

「分かりました。ご本人と連絡してみます。少々お待ちください」

受付の人は席を立ち、病棟へ行った。

俺は長椅子に座る。

数分後。

「藤木様」

看護婦さんが帰ってきた。

「特別に3分だけ面会を許可します。着いて来て下さい」

「は、はい」

俺は立ち、後を着いていく。

廊下を暫く歩いていると、

「こちらが坂倉さんの部屋です」

「あれ？7階から移動したんですか？」

「はい、今日退院の予定だったもんですから」

「そうだったんですか」

「では面会を始めますよ」

ガラガラ

中に入ると、坂倉さんが酸素マスクをしていた。

「坂倉さん」

「ふ、藤木君」

「ごめん、連絡無しにこんな朝早く来ちゃって」

「いいよ。でもどうして…」

「実はさ、坂倉さんにどうしても言いたい事があるんだ」

「な…何？」

「実はさ…俺…ずっと」

俺は一呼吸をし、そして、

「好きでした！」

「えっ」

坂倉さんは急に赤くなった。

「ごめん急に。でもこれだけは伝えたかったんだ。何日か前に行こうとしたんだけど手術直後だから迷惑かって。今日も迷ったんだ。でも…なんかもう会う機会チャンスないかなあって思ってた…もう…面会が出来なくなっちゃうのかなって思ってた。だから…」

俺は全ての事を伝えようとするが、なかなかその先が言えない。

ヤバイ頭が段々真っ白になってきた。

「だから！退院したら一緒に色んな所を巡ったりしたい。だ、だから…っ、付き合ってください！」

俺は坂倉さんに伝えた。

「…」

暫く間が空く。そして坂倉さんが口を開ける。

「あ、ありがとう。でもあたし達は無理だよ。だってあたし余命一週間なんだよ」

「え？」

坂倉さんの言葉に衝撃を受けた。

「前に両親に言われたの。だから…無理だよ」

坂倉さんは涙を流す。

「そんな、そんな事はないよ。例え余命一週間だろうと生きる道を捨てちゃいけないよ！一日でも、一分一秒長く生きられるような心を持たなきゃ」

「無理だよ…あたしはあともうすぐでこの世からいなくなるんだよ。まずあと一週間じゃ…」

「バカ！」

俺は叫んだ。

「えっ」

「何弱気になつてんだよ！わりいが今の坂倉さんは俺のタイプじゃねえ。俺、こんな人を好きになつてたのかよ。なんか損したぜ。俺はもつと心の強い坂倉さんが好きだったよ！」

俺はそう言つて部屋を去ろうとする。

「藤木君！」

坂倉さんの声に俺はドアノブを触った状態で止まった。

「坂倉さん…俺、待つてるから。ぜってえ死ぬんじゃねえぞ」
ガラガラ

俺は部屋を出て、走っていった。

「藤木さん！」

待っていた看護婦さんが呼び止める。

「すいません。俺帰ります」

俺は再び走った。

クソ…涙が出ちまいそうだ。

俺は拭いながら病院を出て、自転車に乗り、漕いだ。

「ういゝす」

「よお藤樹。あれ、おまえ目どうした？」

「ちよつと朝から痛くてな。別に問題ねえから」

俺は席に着く。

「そうか。藤樹くこれ読むか？」

志原が月刊誌を見せる。

「おう、貸してくれ」

俺は席を立ち、雑誌を借りる。表紙を見ると新連載の絵が載っていた。

「新連載！自宅警備員から医師になる…か。ちょっと読んでみつか」
新連載のページを読む。

物語は主人公、小池 健一は大学受験に失敗し、引き籠り（この人達の事を自宅警備員という）。そんな彼には好きな人がいる。しかし彼女はある日謎の病にかかってしまう。その事を知り、彼は彼女の病気を治す為、医師の道へと進むという物語。

読んでいくうちに何だか今の自分に近いような気がして来た。

俺も医師になって坂倉さんが病気を起こす度に傍にいてすぐ治せるような人になりたい。でも医師って難しいいなあ。

読み終わり、俺はそんなことを思った。

その頃、病院。

美夜はあれから微動だにせず天井を見ていた。

藤樹君に…藤樹君に振られちゃった。

あたしどうしよう…そんな事を思っていると涙がまた出てくる。

あたし…もう会えずに死んじゃうのかな…

その時、頭にあの（・・・）言葉が過ぎる。

「バカ！」

「何弱気になつてんだよ！わりいが今の坂倉さんは俺のタイプじゃねえ。俺、こんな人を好きになつてたのかよ。なんか損したぜ。俺はもっと心が強かった坂倉さんが好きだったよ！」

そうだ…藤樹君の為に…そしてお父さんお母さんの為に、少して

も長く生きなきゃ。こんな病気なんかに負けてられない！絶対退院して藤樹君に言うの

好きだつて。

美夜は涙を拭いて誓った。

あれから二週間後。自宅に専門学校から通知が届いた。
俺は中身を取り出すと…

「藤樹 後様。合格」

やったあああああ！！！！

俺は喜んだ。

しかしあまり素直には喜べない…何故なら前回の面会で俺は坂倉さんを傷つけるような言葉を言ったから。あれから俺は謝りに行くこと何度も病院に行つて面会の申請をしたり、メールを送った。しかし面会は断念られ、メールは返つてこない。

「坂倉さん大丈夫かなあ」

俺は段々心配になつてきた。

更にあれから一週間後、昼休み。
ブルブルル

「はい、尾淵ですが」

「尾淵先生ですか？私坂倉美夜の母です」

「お母様ですか。坂倉さんの体長はどうですか」

「実は…美夜は今朝亡くなりました」

カランカラン

掴んでいた箸が落ちる。

「ほ、本当ですか……」

「はい、本日午前5時38分に」

「そうですか」

「なので先生、この件に関して先生から生徒の皆さんにそうお伝え下さい」

「分かりました」

ガチャ

HR。

「じゃあ明後日までには提出な」

皆はわいわいしていた。

「……ったく」

先生はやれやれというような顔をしていた。

「よし、じゃあ最後にだ……皆、よく聞いてくれ」

突然先生は深刻な顔になった。

それに応えるかのように皆静かになった。一体何が話されるんだろ……

「皆に……皆に大事なお知らせがあります」

先生は躊躇いながらも言う。

「え、病気を闘っている坂倉 美夜さん……今朝

亡くなりました」

「……え!?」

クラス全員が驚いた。勿論俺も驚いた。

嘘だ……。坂倉さんが……坂倉さんが……亡くなるなんて……。

俺は心の中で何度も何度もそう叫んだ。

「昼休みに坂倉さんのお母さんから電話で伝えてくれました。皆、突然の事で申し訳ないのだが、坂倉さんは長い間病氣と闘っていた。一刻も早い退院を私たちは望んでいましたが、坂倉さんは残念ながらあの世へ逝ってしまいました。皆さんで坂倉さんへのご冥福をお祈りをしましょう……それでは今日のホームルームを終わります」先生は教室を去った。

本来なら皆ワイワイはしゃいでる筈なのに今日は皆席から立とうとしなかった。やっと一人目が立ったのは終わってから10分後だった。

徐々にクラスメートは教室を去る。

「藤樹、俺帰るわ」

「お、おう……じゃあな」

志原は席を立ち、荷物を背負って帰る。

30分後、職員室。

「すみません」

お母さんが突如入ってきた。

「どちらさまですか？」

「私、美夜の母親何ですが。尾淵先生を」

「尾淵先生！」

「はい」

声に反応して、尾淵先生がきた。

「美夜さんのお母様」

「突然で申し訳ありません」

「いえいえ、こちらこそ」

「あの……美夜からですね、これを藤樹君に届けて欲しいんですが」
一通の手紙が渡された。

「藤樹に……ですか？」

「はい。では宜しく願います」
そう言って美夜のお母さんは帰っていった。

数分後。教室には俺だけになった。

外は綺麗な夕日が眩しく照らしていた。

「あつ」

先生が教室を見る。

「藤樹」

「は、はい」

「ちよつと職員室に來い」

俺は席を立ち、職員室へ行く。

「藤樹、坂倉のお母さんからおまえに手紙を渡してくれと言って来たぞ」

「手紙…ですか？」

「そうだ。家に帰ってしっかり読んでおけ」

「わ、分かりました」

俺は職員室を出る。

一体何だろう。そんなことを気にしながら俺はカバンの中に入れた。

「ただいま」

「おかえり」

何時ものように帰宅し、俺は二階の自室に入る。

そして手紙を取り出し、中身を見ると一枚の紙が入っていた。

「坂倉さんだ！」

何十行も書いてある文字の下には「坂倉 美夜」と書いてあった。

「藤樹くんへ。」

先日はお見舞に来てくれてありがとう。とても嬉しかったよ。

前のお見舞の時に佐々原くんは私に「バカ!」とか「何弱気になつてんだよ!」とか「俺はもつと心の強い坂倉さんが好きだったよ!」

とか言ってくれたよね。私あの時、嬉しかった。あの時言ってくれなかったら私ずっと元気が無くて、ただ詰まらない余命生活を送ってたかもしれない。けど佐々原くんが言ってくれたおかげで、生きる事の大切さを知った。早く治して、早く退院して佐々原くんと一緒にデートがしたい。今も私は病氣と闘っています。けど頑張ります!一日も早く佐々原くんに会うために(*^ ^*)

またお見舞来て下さいね。 坂倉 美夜」

「坂倉さん、坂倉さん…」

俺は涙を流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8187r/>

二人の間に潜む魔物

2011年9月6日03時16分発行